

日本記者クラブ会報

第114号
1979年
8月10日発行

東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一
プレスセンタービル9F 電話100
社団法人 日本記者クラブ 発行
電話五〇三二七二二(代)

サミット後の経済運営がテーマ

金子、河本、江崎の各氏を招く

七月のクラブの行事は、例年に比べれば活発だった。昼食会も三回、記者会見二回、シリーズ研究会一回。それにクラブ主催の特別試写会(チャイナ・シンドロームⅡ二十五日)などがおもな行事だった。



成長の確保へも配慮しなければならぬ」として総需要抑制にはむしろ慎重な態度を打ち出し、従来の見解との間に微妙な相違を見せた。



幹線の合理化もさらに進めるべきだと説明し、これに関連して職員の退職に伴う、共済年金の将来は資金難に陥るので、一般公務員共済年金とのリンクなど国の援助が必要な旨を述べた。

さらに、河本敏夫自民党政調会長(二十六日)は「二〇ドル原油と日本経済」の題で、サミット後の情勢に照らし、新七ヶ年経済社会計画についての自民党の考え方を説明した。「石油五%節約さえ実行すれば、さきの石油ショックの二の舞は演じなくて済む」とむしろ楽観的な見通しを述べたが、実業界出身の同氏だけに「インフレを警戒しつつも、成長経済の道をとるべきだ」と述べ、

また国民貯蓄の盛んなことが日本経済の強みであるとし、貯蓄優遇の方針を続けるべきだと述べた。また増税についても中所得層への増税には慎重な態度を示し、大蔵省などの考え方との間に多少の相違をみせた。

江崎真澄通産相の記者会見(二十七日)をはじめ昼食会の予定だったものが、宮中の昼食会がはいったため急遽記者会見に変更になったものだが、この席で同相は二週間にわたって歴訪した中東諸国の印象を述べ、日本は同地域に対してもっと緊密な接触を持つべきだと強調、大平首相の同地域訪問を要請する考えを明らかにした。また通産省が作成したエネルギー十年計画の概要を発表、翌日の各紙面を飾った。

このほかアンドレ・スタコビッチEC対外関係首席顧問の講演会(九日)、シリーズ研究会「アジア新時代」第六回として小倉貞男読売新聞記者の講演会(十七日)が行われ、同氏はベトナム、カンボジア両国の取材旅行で直接見聞した同地方の現状を紹介した。

八月一日現在の会員状況

法人会員	一四二社
基本会員	六一四人
個人会員	八〇五人
法人・個人賛助会員	四二社
特別賛助会員	一二四人
名誉会員	五人
計	一八四社、一、六〇二人

NEWSCASTER

ずいそう

あれは一月の終わりのことだった。家人からきびしく「門限十一時」をいい渡された。

車の運転も、免許をとってから三月目ごろが、気のゆるみから事故を起こしがちだという。私の場合も、ニュース・キャスターを引き受けてから三月目、やや初めの緊張感が薄れてきたころのことだ。親しい先輩、友人と飲む会があり、散会后、風邪気味とは思ったが、誘われて二、三軒ハンゴをした。カヲオケで何曲か歌い、ご機嫌で帰宅したが、一夜明けたら声が全く出ないので愕然。この日はニュース担当日だったからである。

門限11時

夕方までに何とか声をと、ウガイをし、ノドにいいという薬を何種類も飲み、テレビ局の診療所で本番直前まで吸入してもらったが、薬石効なく、とうとうこの世のものとは思えぬ声を振りしぼりながら、本番をすませた。あとで友人から「酸欠の金魚」と冷かされるほどの惨憺たる有様だった。

それほど期待して見守ってくれて

いるわけではないにしても、何百万かの視聴者の方々には大変失礼したわけだし、局側にもご迷惑をかけたと深く反省したが、何よりも閉口したのは家人からの攻撃。「あなたは大体、プロ意識が欠如しているのよ」と攻められて全面降伏、以後、こども並みに門限を守らされる羽目になった。

久之 三宅

ともかくテレビは怖い。二日酔いの日、疲れた日、さえない表情は隠せない。担当日の番組は、帰宅後ビデオで再生して見ることにしているが、とても素面では正視できない。ガマの油ではないが、わが身のあまりの下手さに冷や汗タラタラで、減量できるほどである。民放各社のキャスター諸氏は、多くが友人だが、皆さんうまいのでいやになる。

しかし、まれにだが、政治ニュースのコメントをした時など、スタッフから「斬れ味よかったですよ」とほめられたり、視聴者の方から激励の手紙をいただいたりすることもある。そんな時は本当に嬉しい。これがキャスター冥利というものかと思う。いつまでもやれる職業ではないだろうが、信頼されるキャスターへと努力してみたい。門限を守るようになって、幸い体調もいよいよである。(全国朝日放送)

ニュースキャスターはテレビ局の顔である、といわれますが、人間の体は顔だけでは成り立ちません。四肢、内臓が必要です。

テレビでは心臓からエネルギーをもらい、頭脳から指令を受けているにもかかわらず、「顔」だけが脚光をあび、ニュースをわがもの顔に伝える。これは明らかに矛盾であり、虚構です。

ニュースはまず情報であり、特定の伝達者、個人の姿をとることはありえないからです。

それを百も承知の上で、外国もふくめほとんどすべてのテレビ局がニュースキャスターをそろえているのを見ると、これはもうメディアとしての宿命と考えざるをえません。さもないと、テレビニュースはコンピュータディスプレイと同一ものになっ

不遜は禁物

てしまいます。

テレビは驚くほど多数の人力を要求します。新聞の世界から移ってきた先輩記者が「テレビはすべてが組織・組織。これにくらべれば新聞作りは簡便だった」と長嘆息していました。

それだけ多くの人の作業をまきこみ

ながら、放送が始まるとテレビは、「彼」一人だけがニュースであるかのように「彼」を仕立てます。

彼の前には、見えざる視聴者が彼を見ています。彼のうしろには、記者、カメラマン、イラストレーター、照明、技術……大勢の同僚が働いています。彼らの仕事は、「彼」を通してのみ実現されます。これは「彼」にとって大変な重圧でなくて何でしょう。視聴者と同僚の双方が彼になんとか我慢してくれるのでなければとてもやってゆけるポストではありません。

山川 千秋

ニュースキャスターの条件は、とよく質問されます。私は、やさしさ、と答えることにしています。「彼」に必要なのは不遜にならないこと。そして「彼」の仕事が可能にしてくれる人々への感謝。これを忘れた時、「彼」は一瞬のうちに崩れます。彼はテレビ局の顔ではないのです。ニュースを伝える方法論はこの次にくるのだと、自戒の毎日を送っています。(フジテレビジョン)

「その局の顔」とまで言われる
ニュース・キャスターとしての「仕事」の「悲喜こもごも」を書けという
「局の顔」とまで言われる「仕事」に
もあることは承知している。

それはそれで光栄なことだし、自
重もしなければならぬと考えては
いるが、それにしても他局のキャス
ター諸氏はいざ知ら
ず、新聞社を離れ
て十年、一匹狼とし
ての生活をしてきた
私にとっては、局
の顔と自分の顔
とをどう調和させて
いくかが、最大の問
題である。それに
くれば、スケジ
ュールのやりくりや体調の保持など、
枝葉末節のことにすぎない。

当然のことながら、局には局の立
場があり、編成権があり、またそこ
まで肩肘張らずともいまのマスコミ
でよかれあしかれ慣用句となってい
る抵抗の少ない言いまわしもある。し
かしこの十年、個人として執筆、講
演し、主張してきた私にとっては、
私なりの筋もある。テレビのニュー

二つの顔



ス・キャスターのときだけ、テレビと
はこんなもんだと考えて二枚舌を使う
ことはできない。そんなことは、テレ
ビの視聴者に対しても、私の文章の読
者に対しても失礼きわまることだし、
一記者としての私の自殺行為ともなる
からである。

孝太郎 俵

たとえば、こんなことがあった。原
稿にベトナム解放という表現があ
ったのだ。筆者はたぶん慣用句として
使ったのだろうが、私は文化放
送のキャスターをしていた九年
間の電波の仕事を含めて、そう
いう表現を使ったことはない。
北ベトナムによるベトナム全
土制圧といふサイゴン陥落
といってきた。事態は解放
どころか新しい圧制のスタート
になるだろうと言ってきた。そ
れがフリープレスの立場に立つ
記者の当然の見方だと思ってきたし、
いまも思っている。

私としては、発言の場がどこであれ
ベトナム解放とはいいかねる。ス
タッフとかなり議論して、表現を是正
させてもらったが、こうしたことは日
常非常に多い。それが許されるから私
はこの「局」でこの「仕事」をしてい
るわけだし、この「仕事」に自負と誇り
を持つていられる。(ラジオテレビジョン)

二十三年間の新聞記者生活に訣別、
NTV入りし、早や五年を経過した。
あの非情で恐しいカメラ・レンズとの
対決にもようやく慣れてきたが「画面
に出るキャスターの顔は商品である」
(担当ディレクター)というほどに、健
康管理とコンディショニングには人
一倍気を使わなければならない。とこ
ろが、これまた人一倍の呑んべい、食
しんぼうときているので始末が悪い。

レンズとの対決



もちろん、こうした精密検査を受け
るのは生まれて初めてのことだが、検
診前三日間は、アルコール類は一切禁
止、肉・魚も食べてはいけないという
きびしい条件に耐えた。検査当日
は早朝番組でノドが乾いたが、水を飲
むことも許されない。

福富 達

センターに入り、下着一枚になつて
検診衣に着替えると、ちょっとした悲
壮感におそわれる。検査は採血、採尿
から始まり、胸部レントゲン検
査、バリウムを飲んだの胃腹部
レントゲン、心電図、血圧、肺
活量、眼底検査、視力、聴力へ
と進み、第二次採血と胆ノウ検
査で手間どったのはは無事終了
した。
データはすぐコンピューターに
かけられ、担当医から結果が告
げられる。「軽い糖尿病ですか
ら食餌療法をつづけて下さい。それか
ら肝臓が少しくたびれているので酒の
量を少し減らすように。あとはすべて
順調でコレステロールなどはきれいな
ものです」とのご託宣である。その
夜、四日ぶりの酒に陶然となつてしま
い、下剤を飲むのを忘れ翌日一日中白
い塊と悪戦苦闘させられたのだった。

も欠かさず受けているが、春の検診で
「軽い糖尿病」と診断され、一日二千
カロリー以内の食餌療法にはいった。
七十八キロあった肥満体を七十三キロ
にまでは減らせたが、これから先がな
かなか思うようにいかない。
折りも折る、ある雑誌社の企画で
「人間ドック体験記」を執筆すること
になり、過日都内のT健保検診センタ
ーに一日ドック入りする機会を得た。

(日本テレビ放送網)



▼F P I J (在日外国報道協会)の副委員長になりました。F P I Jは有楽町の外人記者クラブの中にある、外国特派員の組織です。外人記者の日本での取材にかかわる問題が(調整も含めて)すべて守備範囲です。委員長は南ドイツ新聞のヒルンジャーさんです。F P I Jの活動に対して日本のプレスの皆さんのご理解とご支援をお願いします。

(吉沢正也)

▼お暑うございます。ことしの夏はオーストラリア大使館も、省エネルギーを実践しています。メナデュー大使は百三十四名の館員が快適に仕事ができるようにと、開襟シャツやサフアリ・スーツの着用を許可しています。

また、本館の廊下など執務室以外では照明を半分にしており、館員の家庭での冷房の節約も呼びかけております。

(武田吉朗)

▼日加国交五十周年を記念して、日本カナダ学会では八月三十一日から九月二日まで八王子の大学セミナーハウスで「日加会議」を開きます。

テーマは「カナダ史の特質」、「カナダの文学」、「日本人移民の歴史」、「国際経済と日加協力」など。

また、九月三日午後六時から朝日新聞社講堂で「日加関係とカナダの多文化主義」をテーマに、講演と映画が予定されています。

参加申し込みその他詳細は、津田塾大学国際関係学科内、日加会議事務局(〇四二三)四一―二四四―内線六二(ただし月、火、木のみ)へ。

(殿木圭一)

▼先月の29日で満70才となり、日大を退きました。ことしの夏も例年どおり孫の文明君(小三)とタテシナ(7/3と8/7)へ行きます。孫との「ゴーカートレース」も一興です。

(殿木圭一)

▼暑中休暇のシーズンにはいり、クラブ事務局の職員も交代で休暇をとらせていただいています。小生は一人ものかなしき、休んでもするところがないので原則として休暇はとらないことにしていますが、今年はずきに死去した亡兄の遺骨を故郷の墓に納めるため八月三日から七日まで休ませていただきました。

また、小生住居を移転しましたので、この紙上で転居通知に代えさせていただきます。新住所は次の通りです。

一六〇 新宿区大京町二八
エンパイアコープ三〇八

(藤本有典)

会員の著書

直言閑論―読売新聞編集手帳から 森脇逸男著

縦言直論 大前正臣著

ケネディ家の発想 今 静行著

経済数字に強くなる本 今 静行著

国際連合の新しい潮流 今 静行著

国際秩序の構造変化への対応 齋藤鎮男著

昭和の反乱(上・下巻) 石橋恒喜著

七〇年代政変期の中国 江頭数馬著

外交記者日記 平野 実著

宮沢外交の2年(上) 黒木壽時訳

二〇〇一年の世界 黒木壽時訳

新経略本部の発想 市橋立彦・和彦著

新聞の編集と整理 市橋立彦・和彦著

価値判断・見出し・レイアウト 三樹精吉著

以上ご恵贈いただいた本です。ラウンジの会員の著書コーナーに収めてあります。

なお、書棚の本を借り出す際は、必ず貸し出しカードに必要事項をご記入のうえ、受付へお申し出ください。

また、ご著書を寄贈されるときは、サインと年月日をお忘れのないようあわせてお願いいたします。

7月9日(月)

全国各地での講演のため来日した、ECのアルクサンドル・スタコビッチ対外関係首席顧問。パリのエコール・ポリテクニクを卒業後、ソルボンヌで法律学、コロンビア大学で政治学と国際経済学を専攻。

EC委員会に入る前の国連勤務時代から予測の専門家とあってか、当初予定の講演テーマ「日欧の経済構造の比較」を急に「西歴二、〇〇〇年の途上国と先進国」に変更して、OECDの二、〇〇〇年レポートとECの一九九〇年予測についてたっぷり二時間の独演。

予測というのは誰れも批難される人がいないが故に度々なされる、といった人がいるそうだが、人の想像力をわきたたせ、解決済みと未解決のものを整理し、



「時間」を忘れさせるということか。予定時間を一時間半オーバーして四時半終了。

7月12日(木)

国鉄再建の手がかりを得るため、就任以来毎月、国鉄幹部との会合を持ち、ピンチを親念的にはなく肌身で感じるようなシステムづくりにまい進している森山欽司運輸相。

そのかいあってか、国鉄自身の手による再建案も出

され、第一ラウンドは終り、今後は概算要求への第二ラウンド。



黒字見通しのたない東北・上越新幹線や減量経営で人員削減をはか

っていく際、当然予想される年金の問題など、前途は多難だが、森山さんのなみなみならぬ再建への情熱と使命感に期待したい。

政府・自民党も国鉄、米、健保の3K赤字に本格的に挑む姿勢を見せはじめたが、3K担当の大臣だけは猫の目のように入れ替えるのは避けて、腰をすえてじっくり対応してほしいもの。

7月17日(火)

シリーズ研究会「アジア新時代」の第六回は、読売の小倉貞男会員を講師に「見てきたインドシナ」のテーマで行われた。小倉記者は昨秋と今年三月～五月のインドシナ取材の体験を会員に報告する形で、約一時間講演した。



中越戦争のおり、中国軍が夜進軍の際使用して、ベトナム兵を脅やかしたといわれるプラ

スタック製の笛や、お金のない国をつくらうとしたポルボト政権が印刷していた紙幣なども持参して、プノンペンの現状、ポルボト軍の勢力範囲、ベトナムの対カンボジア政策、今後予想されるベトナムの外交戦略などについて見聞をもとにした話を展開した。

とくに、ベトナムの今後の外交戦略と油田開発をむすびつけた同記者のシナリオは興味ぶかいものだった。

7月26日(木)

「二〇ドル原油と日本経済」のテーマで、河本敏夫自民党政調会長の昼食会を開催した。

会食後、河本氏は、二〇ドル原油の責任はスポット市場の混乱に乗じたOPECにもあるが、そういう状況をつくった先進国、とくに5月段階でのアメリカの対応のまずさにあった、と切り出し、エネルギー政策、景気見通し、財政再建等について約一時間講演した。

講演の中で、大平首相の二百万～三百万の中所得層の増税案や、一部で検討されている預貯金のマル優の見直しに対してブレイキをかける発言をし、また、はじめて代替エネルギー開発の規模を一九九〇年までの十一年間、四～五兆円と明示し注目された。

そのため翌日の各紙はいずれも一面の扱い。とくに毎日、サンケイ、東京はトップ扱いだった。

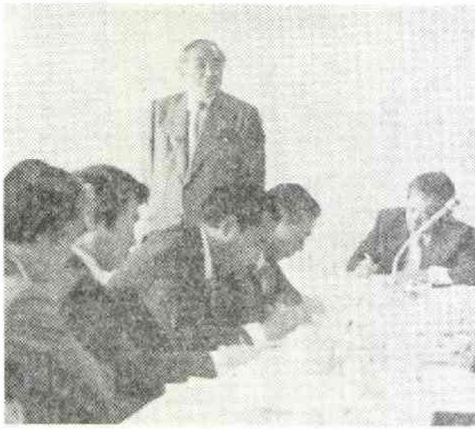
サミット後の経済運営は

景気と物価の両ニラミ

(金子一平蔵相昼食会から)

「サミット後の経済運営」をテーマに金子一平蔵相の昼食会が行われた。

蔵相はまず原油値上げ後の経済運営の基本について、雇用不安を惹起させないことを第一に、財政が景気の下支えができないギリギリのところまできているので、活力を持ち始めている景気を失速させることなく、便乗値上げや仮需を警戒し、景気と物価の両にらみでいかなければならない、との考えを明らかにした。その後、景気、総需要抑制、物価、成長率、財政再建などについて概略つぎのような考えを示した。



△景気▽
 昨年の予算編成時あるいは経済見通し作成時には想像もできなかった早いペースで景気は拡大しており、この状況は今後とも続く。今回の原油値

止めることは不可能。

金融政策の一環としての公定歩合の引き上げ策は、今の時点では大蔵省でも日銀でもまったく考えていない。(七月二十四日 日銀・公定歩合一%引き上げ決定)

前回のオイル・ショックで思い切った総需要抑制策をとり、その結果長い不況を招き寄せたが、あつた事態は避けなければならない。しかし、同時に必要な手が後手後手に回らぬようテキパキ打つべき手は打たなければならない。

△物価・成長率▽

原油の値上がり分が、そのまま製品価格に転かし、それが実質賃金のアップ要求につながるという事態は避けなければならない。

今回の原油値上がりは、卸売物価に一・八%の、消費者物価に〇・七%の上昇要因としてはたらく。前者は当初の経済見通しの目標を突破しているが、後者は目標の範囲内に入っている。経常収支は6億ドル程度の流出と予想されるが、(すでに4月、5月も赤)資本収支が好調なので心配することはない。

石油の輸入額の増加分だけの直接効果だけで、成長率には〇・六%の引き下げ要因としてはたらくが、そう大きなマイナス要因ではない。

△財政再建▽

十五兆という今年の国債発行額はすでに限度だ。石油ショックを受けている際だが、それはそれとして切り離してこの問題に対応しなければならない。現在、サマーレビュー中だが、増収増にもなう地方交付税や国債償還費を別にして、他はすべて本年度と同額としてもわずかに二兆円しか削れない。大変困難ではあるが、歳入歳出全般を見直し、新規事業もスクラップ・アンド・ビルト方式ですすめるなどして、なんとか財政再建の手がかりをつかみたい。

初めから新税反対では財政の再建はできない。いままでに野党が提案している富裕税、再評価税などの程度ねん出できるのか。あるいは所得税、法人税で相当思い切った増税をした具合はどうか。またそれに耐え得る状況なのかなどを具体的に議論していかなければならない。法人税なら一%のアップで一、八〇〇億円くらいにはなるが、これも自から限度がある。所得税にしても年収一、五〇〇万とか二、〇〇〇万以上というのは全体の一%程度なので、課税最低限度の引き上げでもやらなければダメ。そうなるともったたくの大衆課税ということで世間の納得は得られない。

この頃の物品税の納税状況を見ても、高価なものが相当売れているようなので、所得だけで担税力をつかむのではなく、消費の状況でそれをつかむ消費課税を所得課税にからませてやることが、低成長時代には必要なのではないか。

所得課税を補完する意味での消費課税を、日本でも真剣に考える必要がある。

(54・7・4 司会 真崎会員 出席61名)

人民服の似合わないベトナム

—責任大きい日本の立場—

長谷川 孝 昭

(初代駐ベトナム大使)

三年二カ月、ハノイに初代大使としてまいりまして、帰ってきたわけですが、その間感じましたことを率直に申し上げてみたいと思います。

ベトナムは長所もあれば短所もある国です。当然のことですが、いろいろ問題をたくさん持っているように思います。私は一貫して日越友好ということ念願において生活し、相手と接してきたわけです。また、私が初代であるわけですから、全く相互理解が欠けているといってもいい状況だと思いましたが、あらゆることを率直に向こうに申しました。その結果、全体として見た場合、かなり憎まれたかなという心配もありました。しかし、帰るときにいろんな方に挨拶にまわりました。そういふことはまったくなくて、フアン・パン・ドン首相にもかなりぶしつけに質問をしたわけですが、率直な発言を歓迎したいというようなことを言ってくれましたので、ホッと安心したようなわけです。そういう点ではベトナムの人もなかなか話せるというように感じまして、これはよい点ではな

いかと思つて安心しているわけです。

これも、ベトナムが嫌いだ、ということから物を言うところはいかんとするわけです。その場合には、お世辞を言つても通用しない相手かもしれない。なかなかしつかりした人たちです。……ただ、日越友好ということから物を言えば大丈夫です。これは民間の会社の貿易関係の方でも、新聞社の方でもみな同じだと思います。それぞれ社のためとか、お互いの公益のためという立場から物を言えば、誤解されることはまずないのではないかと、いろいろ感じまして、非常な長所を発見したと思つているわけです。

七六年には国内体制固まる

ベトナムについては、現在、いろいろな見方が世界にあるわけです。このあいだキッシンジャー氏の発言を「読売新聞」で見ましたけれども、かなりきつい見解が表明されていきました。世界的に見ますとまだ落ちていたというか、一定した見方が確立されるまでに至

っていないようです。そういう意味では問題の多い国であるということを感じます。

政治的・社会的安定度、経済能力、資源、人口、勤勞意欲というようなことが、国を評価する場合の尺度になる点かと思つますが、ベトナムについて政治的な安定度という点を考えますと、将来とも安定した国であるろうというように感じます。指導者の中にいろいろな対立があるとは思えません。中国はどうもそれがあると思つて、押している点もあるのではないかと、私は感じますけれども……。

七六年の一二月に第四回党大会がありまして、ソ連の大物のスースロフ氏が出席しましたけれども、その時点で中国にやや親しい傾向の人は排除された、と私は当時から感じていました。たとえばフアン・パン・ホアンという政治局員は、党大会の決定によって政治局からはずれた唯一の人ですが、この人は初代の北京大使です。その後、中央委員の中で北京にいた人がかなり除かれたということが、香港の雑誌等に出ています。そういうこともありまして、すでに七六年で大体固まったとみているわけです。

排除と言いつても、ベトナムの場合は非常に穏やかな除き方で、フアン・パン・ホアン氏は政治局員をはずれてからも議会の副議長——たくさんいますけれども——の一員としていろいろ活躍しています。私もパーティーの際に何度も握手を交わしています。そういうようなことで元気でやっていますから、別に肅清とか、そういうものではまったくないわけです。

これも一つの長所になりますけれども、ベトナムの場合には、イランでやっているような銃殺といったものはまったくない。七五年にサイゴンが陥落したあと

も、そういうものはなかった。

肅清のない革命

ホーチミン市に私は四回行ききました。噂の多いところなのでいろいろ聞いてみたが、血の肅清のようなことは行われていない。こういうことを見ても、かなり穏健な政治のやり方をしている、ということがわかるわけです。

トン・ドク・タン大統領がもう九〇歳ですから、いずれば辞める。そういう場合には、可能性として政治的不安定も考えられますけれども、いまのところは政治的な理由によってどうということは考えられない。

ファン・パン・ドン氏には三週間くらい前に、私も会いましたけれども、非常に元気でした。メーデーの日のバーディンホールにおける演説は、ファン・パン・ドン氏が行ったわけです。そういう点からも非常に活躍しているのではないかと、という印象です。

ただ、バーディンホールのメーデーの演説では、ソ連という言葉を使わずか二〇分くらいの短いスピーチの中に三、四回使っていました。あくまでソ連との協力を図りつつ、中国と戦うという意味のことを二、三回強調していましたので、バランスの取れた穏健な物の言い方をするかれにしてはやや激し過ぎるという感じを受けました。そういう点、異常と言えれば異常を感じましたけれども、それがどういう意味を持つかははっきりしません。

私が赴任したときには、前駐ソ大使のドンという人が農業大臣でしたが、半年くらい後に辞任しました。

これを肅清と見る見方も、当時ないわけではなかつ

た。しかし、私の感じでは、七六年七月に正式に南北両ベトナムの統一が成就したあと、南半分が組入れられたわけですから、いままでも北のほうで非常に有能に働いていった農業大臣も、南のほうのことはさっぱりわからないという事情があって、ちょっと交代してより有力な政治家に代ったわけで、特に肅清的な意味ではなかった、と思っています。

いろいろ人事異動を見ても、ソ連や中国でも時々あるような、激しい意味の肅清はどうもないように感じます。全体が同志として一体感を持って能力に応じて働いている、という印象が強いわけです。

次は社会的な安定度ですが、このあいだ「文芸春秋」に女性の方がかなりきついことを書いておられましたが、南だけを見て現在のベトナムを評価することは出来ないのではないかと、というのが私の感じですが。いまは革命直後ですから、いろんなことが起こり得ます。思うとおりにいっていないというのは当然のことです。しかし、ソ連や中国あるいは東欧諸国の例を見れば、ベトナムがはるかに穏やかにやっているのは事実です。ただ、難民という形で外へ逃れておりますので……

これを黙視している、あるいはわかっていてそれを許している、あるいは奨励している、といったようにいろいろな見方が可能ですが、近隣諸国に迷惑をかけるという点では問題があるわけです。この点で最近とみにベトナムに対する圧力が強いわけですが、私もこのことは率直に向こうに対して言ってきました。

しかし、ここ二、三年はそういう難民が出て、社会的な困難が緩和されているという事態なのかもしれせん。

容易でない統一、困難な経済

制度の上で統一を図ることは簡単ですが、心理的に、精神的に北と一体となるのは、まだ一〇年、二〇年くらい先のこともかもしれませんので、たしかにベトナムにとってこれは一つの弱点であろうと思います。

私、最初、ホーチミン市へ行きまされたときは、日本の旧プロジェクトがある関係で市外を見てまわりました。まだ敗残兵が森の中にいるということで、大使の車は旗を掲げる権利がありますけれども、それをやめてくれというので旗を立てないで、護衛車つきで、〇〇キロ以上をドライブしたわけです。ですから、政権に刃向かう者がいる、ということは三年前もそうでしたし、いまでもおそらくそうだろうと思います。

カンボジアの問題が、今年の初めに起こったときに、もし、その反政府勢力が本当に強力であるならば、いまこそいい時期であると、私はハノイで思ったわけですが、特にそういう動きが現われなかったことから見て、国内は安定しているというべきではないかと思

います。

経済の点が一番弱いところですが、貧乏であるということは疑いもない。否定出来ない事実です。米にしても一人当たり月一五キロくらい必要なところを、二年くらい前に八キロに減らした。しかし、雑穀その他がありますから、空腹でしようが餓死することはないという熱帯農業の強みは持っています。ただ米を食べることはできないようです。八キロがさらに減って二キロも政府関係者でないと手に入らないとか、いろんなことが言われています。これはホーチミン市の話ですが、ハノイでも現在米を入手するのはなかなか難し

い。いろいろな砂利等が混っていて、實際上とても食べられないというふうなことで、消費生活面は苦しくなっていることは事実です。ですから現状は、餓死はしないが、ギリギリのところをやっと生きているということだと思います。

これがただちに労働能率に影響します。外国の援助による製糸工場での労働効率の低下が、外交団の間で話題になっています。

ですから、経済の点は非常に気の毒であると思います。

ある指導者が私にこんなことを言いました。「日本では日米欧協力して中国の近代化に協力すべきだということが言われている。しかしなぜこの貧乏なベトナムについてそういう発言が出ないのか」

この一点については、私はつねに同情的に思っているわけです。特に困っている現在、日本が協力の姿勢を示すということは、あとになって必ず両国関係にプラスにはたらく、と私は感じています。もう少し経ってアメリカも出るようになってから、日本が何かしようと思っても、時期的にはすでに手遅れということになります。日越関係の将来を考えますと、それはマイナスになるのではないかということが、いつも気になってしかたがないのです。

資源の点は、もう皆さまご存じのとおり、ある程度揃っているわけです。人口五、〇〇〇万。かなり優秀な国民ということが言えると思います。

国際政治上の地位はどうかというと、これまた国としてやはり無視出来ない国であろうと思います。インドシナにおいて、中国から言わせれば現在のところは小覇権ということになりますけれども、とにかくそれ

だけの力は備えている人たちであるという点から、将来はますます無視出来ない。成田から飛びまして四時間経ちますと、ベトナムの中部の都市ダナンの上空に達します。非常に近いわけです。九〇〇年前からダナンの近くには日本人が行っておりまして、特に大阪とは貿易の交流があった、という歴史的な事実もあります。

ソ連の指導だけでは困難

国民は瘦せて空腹ではあるが、勤労意欲はかなりあります。しかし、働き方というか、能率よく働くことについてはよく知っていない。日本人などが指導していけば、目に見えてよくなっていく、ということのようです。ソ連の指導だけではうまくいかないのではなにか、という印象です。

現在の特徴としては非常にソ連に片寄っているわけですが、フランスに勝ちアメリカに勝ち、戦争に勝った」というようなことでプライドが高く、意気軒昂な点も特徴です。指導者が特にそうです。

そういった国ですから、やはり、ソ連のような国と手を結んで、一体となつていくということではないと、現在のこの苦しい経済状況下のベトナムとしては、一流の国として国際的に地位を認められない、ということになります。そうしたプライドからしても、ソ連とは手を繋ぎざるを得ない。それをやることによって、東欧諸国、キューバ、モンゴルその他の支持も得られて、国際政治の上で地位が高くなるということですから、まず心理的に言ってもソ連と仲良くするわけです。

特にソ連が欠点をベトナムで出せば今後は別になり

ますけれども、いまのところは無難に過ぎてきている。経済協力を与えていけばそれでいいわけですし、英雄、英雄といって持ち上げていけばいいわけです。現にソ連は東南アジアの社会主義の橋頭堡というわけで、いいことばかり言っています。

ソ連の人のベトナムについての発言は、まるでキッシンジャーが言うことと正反対で、ベトナムの人が喜ぶようなことばかり言っています。たまたま中国が非常に強く出ていますから、その点でもソ連は非常に得をしています。いろんな意味でまる儲けしているのは、真の勝利者は、インドシナにおいてはソ連であるという感じが濃いわけです。たまたま、この三年間、西側の援助もタイムリーに与えられなかった、というようなこともあると思います。

単純でないインドシナ問題

インドシナの場合、いろいろな要素が積み重なって現状のようになっていくわけです。これを一つ一つ分断しまして、切り離して論じますと、いか悪いかは別として、ベトナムの国民や指導者が感じているような感じ方と必ずしも一致しない、まったく違った解釈になってしまふという問題があるようです。

インドシナでは、隠れている要素があります。こんどカンボジアとの問題も、これは共産党のあいだの乱闘事件であるということも出来るわけですが、陰に、地下に隠れてやっていたこと、これは私たちに、よくわからないわけですが、それが元になっている現象がいろいろ出ているわけですから、その元まで全部洗ってみないと、本当の感じ方がわれわれにはわからない。そういう隠れた面が相当あるため、カンボ

アジア問題にしても一般によく言われることとベトナムの人が言うこととはちよつと食い違ってくる。

そういうことで、インドシナ問題を見る場合、非常に厄介ですし、複雑であるというように感じます。

一般的な印象として、一般によく聞くのは、ベトナムの人は悪賢くて、すれっからしじゃないかという見方です。日本人だけでなく、ほかの国の人からも同じようなことを聞くことがあります。

私、一二月は東京で、ファン・ヒエン次官といつも車の中で一緒だったので、すべてのことを知らせるほうがいいと思ひまして、率直に言ったわけです。中国の人と接すると、誠意というものを感ずるが、どうもベトナムの人と接すると、つねに策略や、戦略戦術ばかりという印象である、と言いましたら、「それはわかる」とファン・ヒエン次官は答えました。そして、そのあとつけ加えて、「中国はある程度経済的にも発展したが、われわれにはまだそういう余力が全然ない。そのため物を言うときには、つねに計算でやらざるを得ない、ということ、現状ではしかたがないが、それはわれわれの本意ではない」ということもはっきり言いました。

ベトナム人はすれっからしか？

ともかく、そういうようにいろいろと悪く取られることは事実ですが、ベトナムの人とよく話し合ってみると、彼らも、いまのところではどうしようもないのだ、ということ、西側をよく知らないし、日本についてもまだよくわかっていない、ということもあるようです。つねに相互理解が成り立つとは限らない。私が帰るときにも、「まだ日本との関係も始まったばかりだから、いろいろと誤解されることも多いのです」というようなことを外務省のアジア局の人が言っていましたので、何とか双方努力してだんだんとよくしていかなければならないと思います。

しかし、日本をわかれようと思つても、向こうにはお金がないのですから、日本にそうはこれない。わからせるためには、どうしても呼ばなければならぬ。出来るだけ旅費を持って呼んでやらなければならぬ、ということだと思ひます。あるいはこちらから行くかですが、カンボジア問題などありますと、なかなか政治家も直ちにはおいでにならない。そういうこともあつて、依然として日越の距離は遠いという気がするわけです。これも何とかしなければならぬ点だと思ひます。

よくベトナム人は人を騙すと言われます。グエン・ズイ・チン外相は日本を騙すために来たんだ、という見方も人によってはあつたらしいです。ファン・ヒエン次官が七月に来日したとき「騙されたという人が日本におりますよ」ということも言いました。次官はちょっと意外なような顔をして、びっくりした様子でした。また、中村南東一課長が、京都での食事のときにグエン・ズイ・チン外相に、この騙すという話を出したらしくて、あとで聞いたんですけれども、「ベトナムは自分たちより頭の悪い人を騙そうと思わないし、そういうつもりはまったくない。しかし、自分たちよりも頭のいい人を騙すということはたのしみである」という冗談を語つたようです。

キッシンジャー氏はベトナムが五四年以来協定を守つたことがない、と言つていますが、これはちよつと言い過ぎでしょうし、キッシンジャー氏にとっては便

利な言い方でありましょう。

「騙す」意図があつたらうか？

ハノイに住んでいると、国際政治というのは力の政治である、ということをつくづく感じさせられます。日本は非常に恵まれていますし、ヨーロッパでもそういう実感は薄いと思うんですけれども、ハノイでは国際政治が力であるという実感が強いわけです。

そうなりますと、このあいだも「読売新聞」で猪木正道さんが言っておられましたけれども、私もまったく同感でして、国際政治においては、騙すよりは騙されるほうがより悪いんだ、と考えるべきではなからうか。特に外交、防衛関係に携わっている人たちは、そういう考え方をするほうが実際に安全であるし、実際のな考え方でより健全ではないか、という感じがするわけです。

ファン・ヒエン次官に、「カンボジアにはまさか軍を出さないでしょうね」ということを言つたら、「まったくそのとおりだ」と言いながら、二週間後にはプノンペンが陥落した。騙したんだ、という見方も可能ですが、しかし、私は外務次官がそういう軍の行動についてまで詳しくあらかじめ知っている、と考えるのは無理ではなからうかと思ひます。

グエン・ズイ・チン外相でさえ、ハノイに帰つてきましたのは、私が出迎えましたからおほえていますけれども、一月四日でした。日本のあとネパール、インド、パキスタン、その他をグルッと回つていたわけですね。プノンペン陥落は七日ですから、政治局員でかつ国防委員である彼も、カンボジア問題について事細かくフォローし、決定に参画したとは思われないうわけ

す。

ベトナムがもつと経済力のある余裕のある行政国家になった場合には、日本のように電報を打って、大使館からでもどんどん連絡するでしょうが、現状を見ていますと、大使館と本国とのあいだではあまりひん繁に連絡がなされていないようです。本国の情報から離れて旅行していた、と見るべきではないかと思えます。したがって、直ちに騙す意図があつて来日し、実際騙したんだというようには言えないだろう、という感じを持っていきます。

七八年初頭に「方針」決定か？

私自身は、カンボジア問題が一番表面化したきつかけは、七七年の大晦日のボル・ポトの外交断絶発表と見えています。その直後、すなわち七八年の二、三月頃にカンボジアに対してどうするか、というベトナムの方針が決まった。方針の一つは、ボル・ポトを嫌って逃げてくるカンボジアの青年たちに武器を与えるということ。必ずボル・ポト政権を倒して自分の国を解放する、という、そういう若い人たちが養成し、軍事訓練を施すということを始めわけです。これがそもそもの始まりだったと思えます。基本政策は侵攻の一年以上も前に決まっていたんだらう、と思えます。

ともかく、そういうところからスタートを切り、だんだんと用意をしていたわけでしょう。一方、国際情勢も変化しました。たとえば、イエン・サリがインドネシアへ行ったりして、国際的な協力を得ようと努力したりする。放っておけば国連の事務総長もカンボジアに行くでしょうし、手遅れになるといふような状況を見てとって、一月七日に陥落させたということであ

らうと思えます。

すぐその直前になって、別に決定が行われたということでもないでしょう。それは二、三の本当の軍人専門家に——まあレ・ズアン書記長は関係しているでしょうが——まかされていた、ということだろうと考えているわけです。

そもそもカンボジア問題は、ベトナムとカンボジアの二国関係として分断して見ると、理解が正確でなくなるだろう、と私は感じていきます。

七六年一二月のベトナム共産党の党大会にソ連のリースロフ氏が来た時点から、カンボジア対策をどうするかとか、対中国政策をどうするかとか、南越情勢やこれの社会主義化をどうするか、ということについてソ連とベトナムとの間で協議が行われたであろうと考えるわけです。やはり、ソ連と切り離すことが出来ない。一方また、ソ連の動きは中ソ対立と切り離すことが出来ない。

ベトナムにとっては気の毒なわけですが、中ソのあいだにあつて等距離外交を行うといつても、中ソ対立が激化してきて、その影響がインドシナにも及んでくるといふことになりました。いきおい遠交近攻の政策を取らざるを得ないわけですし、中国との間に国境問題など厄介な問題がある以上は、どうしてもモスクワ寄りになる。一方、そういう気配が一つでも見えれば、さらに中国は硬化するということで、結局叩かれるということになってしまったわけですし、見ていて非常に気の毒に思うわけですが、どうにもならない。

しかし、ベトナムの外交も完璧であつたわけではなくて、中ソ対立のあいだにあつて、まん中を行くようなことをすべてやっていたか、ということになると、

そうでもない。たとえば、ベトナムの指導者が外国へ行くときはいつもモスクワへ先に行く。そしてその帰りにちよつと北京に寄るわけです。こういうやり方もやはり変えたほうがいいと、私は感じていました。たまにはまっすぐに北京に行くということが必要ではないか。つまらないことですが、そういうことを感じたこともあります。

それから中国を見誤った、ということも率直に言つてあつたのではないかと思えます。少し軽視し過ぎた。力を示すために、モスクワに近寄つて見せる。そういうことによつて対抗していく、という姿勢もあつたらうと思えます。ですから、徹底的に中国は決意するに至つたのだらう、と思えます。

リースロフ氏の訪越以後

リースロフ氏のベトナム訪問の翌年、東独の党政代表団、ホネッカー氏その他がハノイ入りしています。これもまた強力な代表団として、首相、外相、党書記らが揃つて北鮮、ハノイ、フィリピンを訪問しました。

この代表団の本当の狙いはインドシナであつた、と私は感じていきます。

いろんな観測があつて、東独の国内経済事情のために代表団が外に出たんだ、という外務省の報告もありましたけれども、やはり、狙いはソ連と一体となつてベトナムに圧力をかけるということであつたらう、と感ずるわけです。

七七年の年末、ハノイ入りしたときのホネッカー氏の演説の中には、ベトナムは社会主義共同体の一員である、という表現がありました。しかし、そのときの

レ・ズアン書記長の答辞には、「ソ連の言う社会主義の国々、そういうものの存在はある」という表現はありますけれども、自分達がその一員になったという表現はなかったわけでは、

ですから七七年の暮には、ベトナムはまだソ連の言う社会主義陣営の一員にはなっていないかった、ということを感じたわけでは、このことは東京にも報告しました。

しかし、それがソ越条約には、一員となったと書いてあり、それを認めていますからあきらかに一員となつてしまつたわけでは、そういうようなソ連の圧力があり、それにだんだんと応じていった、という経緯が感じられるわけでは、

スースロフ氏はベトナム共産党大会の演説で、「コムコンというのは、非常に有益な機構である」ということを述べています。つまり、ベトナムを誘っているわけでは、しかし、ベトナムはすぐには入らなかつた。昨年の六月に入つたということでは、一年半ぐらい時間がかかっているということでは、

スースロフ氏はそのときの演説で、ソ越間にはさらに関係をよくするいろいろな余地がある、ということも言っています。ですから、ソ連としまして、その後大いに努力したんだらうと思えます。

たしか、そのあとスースロフ氏に随行していた、カーツシエフという当時の党書記がホーチミン市を訪問しています。そのあと、こんどは南の有力な党の書記がレニングラードの党に呼ばれて、モスクワに行き、レニングラードを訪問しています。それからロマノフというレニングラードの党の第一書記がホーチミンへやってきました。

こういう経過を見ますと、やはり、スースロフ氏が来たのはムダではなく、ソ連のブレゼンスを南で持つということを実現したわけでは、ですから、スースロフ氏の訪越は非常に意味を持つものであつた、ということを私はいつも感じていたわけでは、

そういうようにして、ソ連は着々とインドシナでのプレゼンスを強めてきたわけでは、ロマノフ第一書記のあと、また二、三回、軍事代表団がソ連から来ていました。

重要な意味を持つ日越関係

そういうことでソ連のブレゼンスが非常に強くなりつづつあつたということ。それに対して西側のブレゼンスが非常に弱い。アメリカは条件をつけて、たとえばカンボジアから撤兵しなければ外交関係を正常化しないという立場です。非常に強い立場で、それはそれでよろしいのですけれども、ハノイにいて感ずるのは、アメリカはブレゼンスを持ってないという、その弱さのほうを感ずるわけでは、あらゆる国がブレゼンスを持つのが、日本のためにもベトナムのためにもいいのだらうと思うのですが……。しかし、依然としてアメリカにはいまのところその可能性はない。フランスやスウェーデンは経済協力をやっております、かなりのブレゼンスを持っています。日本は非常に遅れまして、三年半くらい前に大使館を開設して遅ればせながら関係をつけたわけでは、しかし、幸いにして七六年七月の再統一のあとは、南北にわたって関係を正常化出来ました。それ以後、債権債務交渉が始まりましたけれども、それが終つてからは政府間の協力が始まりまして、日越関係はかなり目に見えてよくなつてきたわけでは、ベトナム側の期待も非常に強いということを、いつも感じていますし、そういう点で将来性は非常にあると思つています。

ただ、経済力がとにかく貧乏の底を衝いており、そういう点で、民間が出るにしても限界があります。第一に借金の返済が出来るのか、という問題があります。必ず返すと言っていますけれども、ここ二、三年は非常に難しい時期だらうと思えます。

そういうことで、実のある関係に一举には至りませんけれども、幸いにして日本の経済協力が続けられており、それを向こうはアプリーシエートしています。ただ時々、変更があるかもしれないという空気が伝わりますので、その点を向こうも非常に気にしています。フアン・バン・ドン首相は、「日本と論争するつもりはまったくない。しかし、圧力をかけるようなことはやめてほしい」ということを言いましたが、そういうところが向こうの真意であつて、何とかして安定した関係を日本と保持していきたい、ということのようでは、

公式論の多い指導者層

町には若い人が非常に多い。女の子が多い。子供が多い。ハノイにおりますと、そういう点でも将来性のある国だ、ということを非常に強く感じます。女の子などはほがらかに自転車に乗って走り回っているし、けっこうお洒落です。もう少し豊かになれば、色とりどりの服はなやかなたのしい国になるのではないかと、というような感じを持ちます。規格にはまった人民服のよいようなもので統一される、ということとはとても出来ない国民である、と私は感じているわけでは、そういう意味からもかなりたのしみを感ずって、この国の将来を見

ているわけです。

ただ、何しろ三〇年続いた戦争の直後ですので、指導者はとかく公式論を振り回す癖があります。また、住宅事情が非常に悪く、自動車も足りず、その他何でも不便ですから、そういう点で人的交流も思うにまかせない。日本との交流にしても、日本より前にいろいろな国が交流計画を申し出ていますから、そういうのも片づけなくておいて、直ちに日本とばかり交流を深め

話題の女性、サッチャー首相にとっては、今回ははじめてのサミット。多少金属的な声で早口の英語。しかし、ヒョイと振り返って通訳ブースを眺め直し、たまたま大平議長の言葉を英語に同時通訳していた私の口の動きが、自分のイヤフォンに流れてくる英語と一致しているのを確認した彼女は、ニッコリ私に（と思っただが）微笑んでくれた。「鉄の女」にしてはとても可愛らしい（失礼）笑顔だった。

ロンドン・サミットで初出場したときのカーター大統領は、同時通訳装置を興味深そうにいじったり、日本の女性通訳に声をかけるためにわざわざブースにやってきたりしたのだが、三度目のサミットでは私たちに全く無関心。それでよいのだ。童顔のクラーク加首相の声が、以外にたく男性的で、顔の表情を見ながら通訳していても、吹き替えのテレビ映画を見ているような感じだった。合同記者会見での彼は、フランス語系カナダ人を念頭におき、英仏交互に、それも英・仏・英・仏・英と五回も切り替えて発言。

るといふのもなかなか難しいとか、いろいろな事情があつて、はかどらない面もあるわけです。

党はいままですべての点において成功してきた、戦争を切り抜けてやってきた、というように自負していますので、どうもイデオロギー的な面がかなり強く感ぜられます。たとえば「各国人民の連帯」というようなことを、非常に得意になって調子高く言うといううな面にも、こうしたことが表われています。日本に

通訳ブースから見た

“東京サミット”

村松増美

(特別賛助会員)

いつも独・英と半々ぐらいにしゃべるシュミット首相はというと、ボンでは議長としては英語、ドイツ代表としてはドイツ語でと器用に使いわけていたのが、今回はほとんど英語。ジスカールデスタン大統領はいつもの通り公式には絶対にフランス語のみだし、アンドレオッチ首相のイタリア語ととに、私たちはヨーロッパから招いたベテラン通訳者たちの英語訳を聞きながら、日本語にリレー通訳。時間のズレはだれも問題にしないほどわずか。本会議の通訳はもちろん難かしいが、私がつと神経をすり減らすのは記者会見だ。討議を通じてコミュニケーションが成立するのではなく、瞬間に通訳が選んだ表現が、世界中に電波や活字で飛んでしまうか

ついても、人民の連帯があつたし、いまでもあるというようなことを強調いたします。そういう点がちょっと耳障りなことがあります。社会主義の優越性——社会主義といつても千差万別いろいろあるわけですから——ただ社会主義の優越性ということを書いて、社会主義をやたらにほめているという点もちょっと問題ではないか、と思うことがあります。

ら。内幕話など内容にかかわることは、通訳の職業倫理から書けないが、通訳ブースという、いわば舞台の「そで」から見た今までの首脳会議などのエピソードを、新刊「続・私も英語が話せなかった」(サイマル出版会)に書いたもので、プレスの方々にぜひ読んでいただきたいと思う。

(サイマル・インターナショナル社長)



しかし、非常な行動力と決断を持っている、ということにはたしかです。これは時には恐れられる点でも、将来物騒だ、という見方も生まれるわけですから、どきどき、とにかく若々しい。スターリン時代のソ連みたいな、何となくそういう感じがありません。現にベトナムはスターリンを批判しておりません。戦争とかいろいろなことがあったせいか、いまの指導者たちは張り切っており、いまだにインドシナ共産党をつくった一九三〇年代当時の意識を持っているようです。

指導者は老齢で交代期の人たちが多いのですけれども、何となく言うことも気迫があつて若々しい。また、戦略戦術に非常にたけているという感じがします。インドシナという特殊な歴史を持った、ああいう地域では、そういうことで切り抜けていかなければならぬ、という気迫なんでしょうけれども、タイなどが怖れるのももつともなわけだと思えます。

大きい日本の役割と責任

ハノイにおりますと、ソ連の一つの非常な強みというのは、アジア政策、世界政策を持っている、ということだどつくづく感じます。西側はアメリカが引いてしまったし、フランス、スウェーデンはプレゼンスしているが、これはヨーロッパで遙かに遠い国です。日本がどうやらやつとプレゼンスを持ち始めつつあるというところでは、日本が西側諸国と横並びで一緒にやうていくという、そういう国がインドシナでは結局ないわけですね。

ソ連とか東欧などが非常にプレゼンスを持っており、また努力もしている。日本はあくまで独自の立場でいかななくてはならない。プレゼンスを持っている強

い友だちがインドシナにはいない。英国などは、キチンとした考え方でベトナム情勢などについても、いろいろと私たちに物を言いますけれども、英国政府自身はアフリカのほうがよほど大切で、インドシナは遠いところで手も届かないし、経済協力もできない。そして、こういうのは日本にお願いしよう、という考えになつてしまふわけです。西ドイツも同じです。西ドイツは債権債務問題さえまだかたづけしていない状況です。ですから見回しますと、熱心なのはスウェーデン：

。スウェーデンはかつてアメリカと立場を異にしたということもあつて、大いに熱心になつたのでしょうが、いまはその情性みないな形でやっています。フランスについては、ベトナム側もかなりその文化を尊敬していますし、フランスの影響力が厳然としてありますから、その点ではフランスはまだ働きかけていろいろやうていく余地があると思えます。中期、長期に考えると、日本と一緒にやうてプレゼンスを大いに広めることになると思えます。

それがソ連のプレゼンスを減らすことになるだろう、というふうなことで、一緒にやうてやるという気持ちを持っています。フランス以外にはそういう点で日本と一緒にやうて国はないわけですね。ASEAN諸国も最近熱心ですけれども、経済協力が出来るほどの国はない。いろいろと情報交換をし、同じような思想に立つてやうていく友だちではあります。経済協力の面と一緒に揃うてやうて国はほとんどない。やはり、日本がしょつて立つていくほかにないのはいか、と感ずるわけですね。ベトナムにおいては、横並びという考え方は成り立たないと思えます。

ベトナムの指導者はただ者でない

一般にベトナムの指導者はただ者ではありませんので、何か措置を取ると必ず仕返しをする。この点は非常ににつきりしています。日本がもし何かやるなら、国益に反する場合にはやるといふことは考えられませんが、その場合にはそういうところまで全部詰めた上でやらないといけません。

とくに日本の場合には相手が相手で、日本というのは大事な国ですから、とりわけ猛然と批判するだろうと思えます。またその時はソ連もやるだろうと思えます。そういう点でも、日越関係は一挙に悪化するということになるだろうと思えますので、やはり、経済協力の約束は守らなければならぬ。

もちろん、情勢によっては、たとえばカンボジアのような場合、けしからん、というのは当たり前です。そういうことは別に、あまりに強く出過ぎるのは、たとえば安保理事会に代つて制裁機関のようになつてもやるのは、やはり具合が悪かろうといつも感ずるわけですね。

日越関係における一つの問題は、先方の猜疑心が非常に強いということです。猜疑心からどうしても物を見たがるということです。この間も「日中米に陰謀がある」というスタン・トイ外交委員長の談話が、「赤旗」に出ていましたので、私、直接、「それは間違っている」ということを申し入れました。こういう点も一つの問題点であろうと思えます。

このあいだ日本が行った仲裁的な動きについてはやはり、日本でなければああいうことは出来ないということ、外交団でも評判がいいわけですね。ああいうも

のを使っているいろいろコンタクトし、意思疎通を図っていくという事は、非常に意義のあることだろうと感じています。日本がやらないで、もしほかの国がやったら、日本の外交は何をしているんだという目で、ヨーロッパからもアジアからも見られるのだろうと思います。否でも応でもインドシナ問題については、日本は積極的に発言せざるを得ないのではないか、という

日本人の人道主義？

黒木 壽時

(個人D会員)

思い立った時に海外に飛び出せるのが、フリーの特権であり、楽しみであると思う。

今回は韓国に行ってみた。

取材対象について、完全な知識を備えて行くか、全然白紙の状態飛び込むかは、一つの取材の在り方だろう。極端なことだが、ソウルの税関がどうか、いわゆる「経験者」の話は一切聞かないことにした。純粋なアピールにはなにもない方がいい。ソウル滞在は三泊四日(正直いつて懐ぐあいもあって)。

いわゆる「知りたくない予備知識」をわが国の日刊紙は伝えてきているが、東京と何ら変らないソウルの町の動きがそこにあった。外国の中で一番日本に近い

のが私の実感です。

バンコクにベトナムはいつ出るんだ、ということが関心を集め、そういう憂慮があることは事実なのですが、私はベトナムの目的と実力と国際環境の三つの要素をよく見ていけば、大体、その動きはわかるだろうというように考えています。そういう要素が利益と結びついたときに、行動となって出るのだろうというよ

町の顔は、ソウルではないだろうか。

行き当りばったり、ホテルも三つ変えて泊って見た。たしかに物価は急騰している。一流トップのホテルで一万四千元、朝食は千円。

アメリカ人を主とした観光客もいるにはいるが、レストラン、バー、そしてトップ・フロアにあるディスコ・クラブは、むしろ韓国の若い男女でいっぱい。午前十時を一分過ぎれば外出は一切禁止されているから、解禁の午前四時まで踊り続ける。生活は大いにエンジョイしている。町のディスコも同じである。

「男天国」を求めて韓国にわたる日本の観光客は、そこに手近な「享楽」があれば、それで満足なのだろうが、観光誘致を政策の一つに掲げている韓国の複雑な心境は表面には出ない。

「日本が平和を満喫できるのも、韓国のおかげ」というのも偽わらざる韓国人の気持ちだろうし、必要にせまられた韓国の厳しい一面も肯定さるべきだろう。「金大中事件?」日本人にそんな人道主義の気持ちがあったのだろうか? — ある韓国知識人は皮肉な笑いを見せていた。

(7・20)

うに感ずるわけです。

目的と実力と国際環境

共産国の場合でも、いきなり何も無いところへ突如として兵隊が出て行く、ということはないと思えます。たとえばチェコ事件の場合でも、いまから振り返ってみれば、相当前から新聞等でも非常に高まりがあったわけです。いろいろな投書もあるし、組合その他の工場での決議とかいうものも表われて、指導者としてはそれを正当化するということをあらかじめやっているわけです。

ベトナムの場合でも、ポル・ポトがいかに悪いかというのには相当強く宣伝されてきましたし、写真も出たし、外交団も国境へ案内された。そういうことがあって初めてそのあとに出てくるわけです。そのときの目的が何であるか、実力関係がどうか、国際環境がどうかを注目している必要があります。この間の場合、国際環境の点については、アメリカのマクガバン議員でさえ国際兵力を出してポル・ポトをかたづけたい、ということを使うというような情勢があったわけです。ポル・ポトが非常に人気がない、ということもあつたわけですが、それよりもまず、ベトナムの人たちは、自衛権の発動である、という考え方をしています。

この自衛権の発動というのは、外の人達にはなかなかピンとこないのですけれども、「中国はあらゆることをやっていた」というようにベトナムの人は言っています。ある程度はそうだったと思います。あとになつていろいろ出てくる中国系人の問題などを見ますと、ある程度は中国がやっていたのだろうと感ずるわ

けです。逆にベトナムの指導者たちはカンボジアを使って、南北から挟み撃ちで困らせていく、ということを考えていたのだろう。ともかく、ベトナムとしては国境を侵犯されたし、経済建設の妨害も受けた。そういうことから自存自衛のためにやった、という基本認識に立っているわけです。

ですからいまもベトナムの人たちは、南の一部の人たちは知りませんが、それをやらざるを得なかったというように感じているわけです。その点では国論の分裂はない、というのが実情ではないかと思えます。

民族解放であるとか、正義の戦いであるとか、いろいろイデオロギーがあった説明も可能ですが、本来のところは自存自衛、民族の将来のために立たざるを得なかった、という気持ちでベトナムとしてはあるわけです。もちろん、われわれはいかなる理由であろうと軍を動かす、武力を行使したことはよくない、と言っているわけですが、この点はどうしても相容れない点です。

批判的な北鮮、ルーマニア、ユーゴ

現在、ハノイにおいても、ベトナムは楽ではないのです。というのは北鮮の批判が強いのです。ルーマニアもユーゴスラビアも批判的です。もしカンボジアのあれを認めれば、自分の国にも同じことが起こるといふ懸念が共通しているようです。警戒が強く、批判的です。インドもヘン・サムリン政権を承認せず、まだうしろに控えているわけです。

一三対二の国連安保理決議。あの雰囲気はハノイにもそのまま存在するわけです。この点はベトナムが非

常にきつく感じている点だと思えます。

軍事基地の点については、弱さを示すということが、ベトナムの指導者として出来ないということから、どうしてもソ連を引き入れるということになりま。港は老朽化しています。鉄道が中国によって止められたので、港をとにかく改修しなければどうにもならないというので、ソ連の技術者を入れて、いま一生懸命近代化を図っているようです。そのためにも、ソ連に対してある程度の便宜供与を行っている、ということだと思えます。しかし、「改修が終れば技術者は去り、自分の国の港である」ということは強調しているわけです。ダナン上空を日本人が毎日何百人と飛んでいるわけです。先方も別に隠しているわけではないのですから、ソ連の飛行機や軍艦がいるということは、政治的な意味を持ったデモンストレーションという感じを強く受けるわけです。

しかし、情勢がいまよりもっと悪くなりますと、結局はソ越条約の協議に基づいて必要なことは行うわけですから、ソ連が援助の代償に時々使うというようなことも起こり得るかもしれません。ソ連の意図が関係するわけですので——現在、ソ連の軍事基地になったということではないと思えますけれども——将来、事態の発展によってどうなるかはまだクエッションマークのままです。

ソ連の大使は、「東南アジア情勢が悪くなればいろいろ協議してやらざるを得ないが、現在は別に軍事基地をアジアで持とうとは思わん」と言っていました。現地点では、まだそういう事態ではないと言えそうです。

米越関係については、アメリカが入ってきたほうが

いいとベトナムは思っているにちがいないのですけれども、急ぐつもりもないようです。アメリカが最近言っていることをみて、どうも難しいようだと考え、あまり期待をかけていない。

アメリカがなくてもやっていけるといけるのが、ハノイで私たちが強く感ずるところです。アメリカが出なければ困るだろう、と思うのは間違いではないかという感じを、私は持っています。こなければこないでいい、そのかわりソ連からいろいろ貰うという感じがするわけです。ソ連に対してはベトナムとして強く言える面があります。共産党のあいだの国際的義務である、と言えれば押せるわけです。ソ連側にも押される弱みがあり、どうしても放したくないから」という関係があるわけです。

明確にしてほしい「自主独立」

現在の情勢において、私が向こうを去るときに、ファン・パン・ドン首相その他に言いましたのは、「難民問題は誠意を示して下さい。そうでなければこの問題をめぐってベトナムは必ず損をする」ということが第一点。次に对中国関係をよくする努力をしてほしいということ。隣国をどかさすわけにいかないし、無限に闘争できるものでもない。また、対ASEAN関係をよくしてほしいという点。そして「ホー・チ・ミン氏が主張した自主独立のベトナムのイメージが変ってきている。全面的にソ連に依存するというのは独立との関係でどうなるのか。自主独立であるということがはっきりとわかるようにして下さい。こういう恰好のままであくまで中国と戦うというのは無理である」というようなことも伝えました。

日本との関係については、共産党との関係が伝統的にいいというのは、それで結構でしょうが、本当に日本との関係をよくするには、ほかの政党、特に政府与党との関係をよくしてほしいということ。自民党が訪越代表団を出すという場合には歓迎してもらわなければ困るし、そういう意思疎通が非常に大事だということも強調しました。いま日本が直ちに外務省賓客や公使や国賓でベトナムから人を呼ぶというには、ちょっと時期が難しいので、わが国の国会議員がもしベトナムを訪問するということになるならば、双方が意見を自由に率直に交わす上からも、現状を見て理解が深まるといふ点からも非常によいのではないかと、個人的に思うと伝えたくてです。

質疑応答

質問 ベトナムはカンボジアをこれからどういうふうにするのか。収拾についての見通しはどうか。

答 その問題も、向こうと話をすることは、カンボジアとベトナム間だけの問題ではなく、ソ連や東欧諸国一体となつての問題のように感じます。たとえばシアヌーク殿下は反ソ演説をやっていますので、その点からだけでもソ連が応ずることはないだろうという感じを強く持ちます。いまカンボジアの情勢で、ベトナム側にとって非常に有利なのは——これにはソ連が一番関係があるのですけれども——飛行場を押えて空輸を始めているということですね。それと電気もなければ水もないということ、本当に何もありませんけれども、とにかく都市を押えているということ——この二

つが非常に強みだと思つたのです。別に日本の自衛隊が出てくるわけではないし、アメリカが出てくるわけでもない、ということを知っていますし、時間をかけていけば、これは大丈夫だというように考えているようです。空輸でもってだんだん力をつけていく、ということだろうと思います。時間はかかっても目的を達成していくのではなからうか、という感じですね。ただ、タイのほう、山の向こう側があいていきますので、それを利用してもし補給が行われていけば——中国がもっと支援に力を入れていきますと——ボル・ポト政権もかなり長続きしていくということではないか。しかし、大勢はどうももうくつがえらないということのようです。

一方、ソ連は一〇年以上カンボジアでは手こずつて、思うとおりにいってなかつた地域ですから、この際、反ソ的なものは認められない。反ソ的な人はダメだと排除していくだろう。ベトナムもこれと一緒にならざるを得ないということ、時々ほめかされる中立とか、いろいろなことも実際はなかなか難しいのではないのか、という感じを持ちます。あくまでチェコ事件のように、反越反ソでない形のカンボジアをつくり上げていくということではなからうか。妥協をどの程度するかは、ベトナム側から見ますと、非常に疑問です。

ですが、承認が取れませんので——いま一八カ国がそこで止まっていますから——非同盟運動を通じてこれに大いに努力するのだろうと思います。

日野(日経) ベトナムはソ連に軍事基地を将来建設させるか、させないかを交渉材料として、それを見返りとして何らかの援助なりプラスになる条件を引き出そう、という基本姿勢を持っているのかどうか。そ

ういう交渉は可能なのか。軍事基地を貸すか貸さないかについて、ベトナムがどの程度自主性を発揮できるのであろうか。

答 ベトナムの動きがどうなるかは、ソ連、中国、日本、フランス、スウェーデンというような関係国の動きによって、決まってくるという面があるわけですね。ですから中国がまた第二の制裁とか激しいことを行えば、それと戦うためにもソ連に大幅な譲歩をしていくということにならざるを得ないだろうと思えます。いまのところは中国側もだいぶ静まっているようですし、日本との関係もどうやらいけるかもしれないという判断もあるでしょうし、出来ればなるべくバランスを取って、——特に非同盟という運動を重要だと思つていきますから——これ以上さらに深入りしていくのは具合が悪い、という考え方があると思えます。

このあいだも、スワン・トイ書記が私に、ソ越条約は大して重要なものではないんだ、ということをちょっと言いました。そういうふうになんか消していくというか、ベトナムの自主性をわからせていく。しかし、これは指導者としては非常に言いにくいことで、なるべく黙っていて、みんなに勝手に想像させるほうが有利ですから、あまりはつきり説明してはまずいわけですね。

最近私たちに問題を提起するようになりましたし、そういうなかでわりに意味を決していく、というふうな発言もかなりみられるわけです。

中ソの接触などの動きが多少出てきますと、超大国の動きを警戒するという面も出てきましよう。その関係でも軍事基地を与えてしまえば問題だということはわかっているでしょうし、アジアではASEANとの

関係がうまくいかなくなることも承知しているの、結局注意深くやっていくのだろうと思います。現在は特別な基地協定があるわけではなく、条約で協議しているだけです。

もちろん非常事態になれば別で、そのときは何が起るかわかりません。共産党同士の話し合いでパッと与えるかもしれない、という可能性はいつも感じますけれども、特別な非常事態が今後起こらない限りは、ソ連の軍事基地は認めないということではないかと思えます。慎重であることを評価してもらいたいという気持ちですが、ソ連側にもあるようですから、東南アジアでことを荒立てて行くという事は、両方とも希望していかないのではないかと感じています。

質問 ベトナムは日本からの食糧、穀類の援助をこわってきたわけですが、ソ連、コモコンの援助はどのようになっているのか。

答 ハンガリーの大使だったと思いますが、日本からの米を断わったということに対してちょっとびっくりしていたようです。なるべく貰うものは日本からも貰ってほしいんだ、という気持ちがあるようです。最近ソ連なども日本の援助の状況がどうなっているかを、非常に気にするようになっていまして、ベトナムからいろいろ注文をつけられているのだろうと思えます。ソ連としてはベトナムとの仲が悪くなることを非常に怖れているようですから、そういうことからあまりせがまれるような事態にしないことを望んでいるのではないかと、という印象が強いわけです。

頼まれるものは必ず実行します、と口では言いますがけれども、実行の時期等がどうも遅れがちです。港がいっぱいでもどうにもならないという状況から見ても、

本当に経済状況が悪化した場合、迅速に援助が出来るかどうか疑問です。飛行機での緊急輸送も最近かなりやっていますけれども、燃料も補給しなければならぬし、米もということ、ソ連としてもむしろほかの国へ頼めという面がかなりあるのではないかと思えます。米についてもオランダとかヨーロッパに頼んだり、あるいはインドにも頼んでいるかもしれない。

今井(個人) ベトナムは経済的には非常に弱い国で、飢え死にしないまでも食うのが精いっぱいという実情です。ところが中国とカンボジアを相手に二正面作戦を展開しようということ、ソ連からの援助もあるでしょうけれども、独自の産業もないし、一体、戦費というか、戦争をしながらどうして国民を食わせていくつもりなのだろうか。もし倒れるとすれば、経済でパンクするという気がするのですが、そういう戦争と平和というか、国内建設ということ、指導層はどういうように基本的に考えているのだろうか。

答 好んで戦争をやっていると、中国は言いますけれども、実際はそうではなくて、非常に強く構えるけれども、圧力にどうして抵抗するべきかという弱さを、ハノイにいとむしる感ずるわけです。ベトナムとカンボジアとラオスを比べますと、たしかにベトナムが強力です。たとえば飛行機でハノイを出まして、ラオスのビエンチャンに着きますと、人口が少ないし、国民の力というものが少ない、ということを感じます。迫力がないのです。ハノイの町は人口が多くて、みんな忙しく動いていますし、若い人もいっぱいいて迫力がある。ちょっと並べてみれば立ちどころに圧倒されてしまうという感じはあるわけです。そういう意味では、覇権主義でどんどんやっていくんだ、という説明や言

い方もある程度は成り立つんです。実際そうかなとも思われます。しかし、ベトナム側からすれば、より大きな中国からの圧力にどうして抵抗していくか、いろんな手を使っているのに対して、どうやっていくかというこのほうでいっぱいであって、好き好んで余裕のないのやっていると、という感じはないわけです。

昨年、一昨年は天候不順で、農業が非常に痛手を受けたわけです。今年は非常に天候がよくて助かっています。ですから、食糧問題もどうやら乗り切れるという計算のようです。しかし、もうこれ以上、第二の制裁は具合が悪いと思っているようです。私たちも限度にきていると思っていますし、関係をよくして下さいと言っているわけです。こんど起こると、非常に事は重大だ、という意味のことを外務次官も言っていました。米はギリギリだけでもまだ備蓄があると言っていました。六月になると、だいぶ楽になるらしい。

ですから、どうやらあれだけはやっと戦えた。これ以上備えるというのにはちょっとまた別の深刻な問題になって、ソ連、東欧が深刻に思う問題ではないのか、という感じが強いわけです。ギリギリのところ、どうやらあれでおさまったという感じはあります。

関本(時事) ソ連は、かなりベトナムに対してプレッスを強めている。しかし、そのプレッスン強化ということが果してどれだけ成功しているのか、疑問に思うわけです。最近のニューズウィークを読みますと、国家レベルではどうか知らないけれども、非常にソ連はベトナムで嫌われている、とある。たとえばソ連人に間違えられたスイス人が石をぶつけられた、などという非常に悪い面が報道されているわけです。国家レベルでのプレッスン強化に努めても、国民に対す

るアビールに失敗すれば……。そのへんの実情はどうなのでしょうか。

答 ソ連は南ベトナムにはまったくプレゼンスを持っていませんでした。今年おそらく総領事館が出来ると思います。日本も申し入れていきますけれども、ソ連よりもあとになると思います。以前は中国も総領事館を置きたいという希望のようでしたが、いかにとということでした。いままではソ連も合わせてダメだったんだらうと思うのです。

中国は喧嘩してしまったから一応別で、ソ連は今年認めるということになると思います。そういう意味ではゼロだったところに関係が出来てくる、ということはあると思います。ソ連の船が入ったりいろいろしますから、その必要性もあるわけです。有益だからやるということ、意味のないのにやるというわけでもない。とにかくまだひどい状況だから、ソ連の技術等は役に立ちますから、技術者もどんどん入れるということです。いろんなところでプレゼンスがふえてくる傾向は依然として変わらない。

四十プロジェクトとかその他もありますし、中国に代って鉄橋もつくらなければならぬし、もっとプレゼンスはふえてくると思います。

石を投げられたり、夜なかに放歌高吟して嫌われているとか、通訳の人が威張っているとか、いろんなことがよく言われます。たしかにそういうことも小さな問題としては耳に入ることあります。しかし、国の政策としてプレゼンスを持っていくという点のほうは非常に強く感じられます。これを断わってほかからと言っても、ほかからは現在のところないわけですから、その点ではまだまだソ連がプレゼンスを強めていく余地

があると思います。

ただ、軍事プレゼンスをベトナムのためでなくて、自分のところの世界政策、アジア政策としてやっていくということが、どの程度成功するかというのはやはりはなはだ疑問があると思います。そこところが、ちょうど境目にだんだんと近づいているという感じがします。もうちょっとやってみないとわからない。しかし、よその国の出方もこれに無関係ではない。ファン・パン・ドン首相の立場が弱いと言われるのは、彼がわりに西側その他との関係をよくしようと努力して、

『80年代の産業構造』

人気は断然トップです

ことしの4月に、クラブの十周年事業の一環として、日本経済新聞社から刊行した『80年代の産業構造』は四刷りを終わり順調に売れています。

日経出版局の話では、最近の同社出版物の「人気ベスト10」をアンケートしたところ、二位に3倍の差をつけて、この『80年代の産業構造』がトップだったそうです。

どうにも動きがとれなくなってしまっただけで、選別の幅は狭いのです。などと偉い方に言っていたかなくてもすむように、会員の皆さんの一層のご協力、企業経営者、サラリーマン、婦人、学生などより多くの人たちに読んでいただき、明日の産業社会を考えるうえでの「タタキ台」になればと思います。

ある程度やったのに成果が少ないから、それみるということで弱くなっている、などということも言われていますので、全体として協力姿勢をほかの国も取っていかねば、このへんで情勢はそれ以上悪化することはないのではないかと、と思うわけです。ソ連のプレゼンスも、もちろん、意図は非常に強いでしょうけれども、ある程度は全体としては緩和されてくる、ということではないのかと思います。

(54・6・5 文責・編集部)

ゴルフの会

伊藤会員(文化放送)が優勝

優勝	伊藤 登(文化放送)	グロス	95	H. D	23	NET	72
二位	増田 一郎(東京放送)	〃	〃	〃	16	〃	75
三位	浅野 修(新聞協会)	〃	〃	〃	16	〃	76
グロス	近浪 廣(コンベンションサービス)	〃	86	〃	〃	〃	〃

(54・7・20 平塚富士見カントリークラブ)

囲碁の会

堀川会員(共同)が優勝

優勝	堀川 敏雄四段(共同)	四一〇
二位	跡辺 武雄初段(河北)	三一
三位	本田 路威五級(朝日イブニング)	三一
四位	大日向一郎三段(日経映画)	二二

(54・7・7 クラブ大会議室)

第60回企画委員会

昭和54年7月5日(木)
日本記者クラブ宴会場

藤村企画委員長のあいさつの後、事務局長が企画委員会の活動と役割等を説明し、各自が自己紹介。

事務局から5月、6月の行事ならびにサミット関連での対応と結果について報告したのち、7月の行事とクラブゲストを選考。

江崎通産相、園田外相のほか大蔵・外務の両新事務次官等を候補に交渉することを決めた。

また今回の「アジア新時代」はアジアの中進国をテ

目次

七月の行事から	1
〔「ニュースキャスターの随想」〕	2
三宅 久之	山川 千秋
俵 孝太郎	福富 達
ピジョンボックス	4
ウマール・カーン 城尾三郎	
吉沢正也 武田吉朗 吉田健正	
殿木圭一 藤本有典	
(講演記録)	
人民服の似合わないベトナム	長谷川孝昭 7
通訳ブースから見た東京サミット	村松増美 13
日本人の人道主義?	黒木壽時 15
事務局から	20

ーマに行うことを決定。

出席 藤村委員長。柴田、石丸、安田、吉村、加野、広瀬、平田、増山、高野、梅本、宮本、今井、鈴木、浅野、河野の各委員。

第28回会員資格委員会

昭和54年7月3日(火)
日本記者クラブ小会議室

出席 中江委員長。山本、赤松、滝沢、関口、遠藤、飯島、藤川、笠置、泉の各委員。

「ピジョン・ボックス」へご投稿を

本号から、会員の皆さんの消息欄「ピジョン・ボックス」を設けました。(4ページ参照)

親しまれる会報づくりをモットーの会報委員会の発案ですが、会員の皆さんからの反応がいまひとつで、編集の伊藤嬢は大弱りでした。ラウンジにお見えの会員の方からの「情報」引きだし等でなんとか本号は埋めました。来月号は?といまから頭を痛めております。

コミュニティーということが新聞でも放送でもよくいわれます。声なき声が本当の声になったとき、このコミュニティーの第一歩が始まるのではないのでしょうか。シブレスという職業的なコミュニティーの場としての当クラブにとっても、会員の声なき声表に出てくるのが一番大切なことではないでしょうか。そして、そのためにも仲間同志たがい知り合うこ

とが大前提になるでしょう。

ハガキまたは電話での会員の消息欄「ピジョン・ボックス」へのご投稿をお願いします。

連絡〓伊藤(事務局)〇三(五〇三)二七二一

寄贈書

ユダヤ人とアラブ人―昨日、今日、明日

サイマル出版会

訂正 先月号(第一一三号)掲載の講演記録「アジアの人たちの意識構造」の質問者のうち、10ページの山内会員(NHK)は、坂本会員(NHK)の誤まりでした。訂正しておわびいたします。

八月の行事

27日(月)午後5時30分～7時30分 市川房枝参

議院議員夕食会 クラブ宴会場

28日(火)正午～午後2時 長岡実大蔵事務次官

昼食会 クラブ宴会場

会報委員長〓小林淳宏 委員〓山崎英祐、桂敬一

栗田格

連絡〓伊藤(事務局)五〇三一二七二一